国立国語研究所学術情報リポジトリ

福井県池田町

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003548

福井県池田町*

松倉　昂平
金沢大学 人間社会研究域　客員研究員

1. 地域の概要

福井県池田町方言（地元での呼称は「池田弁」）は，福井県の中部に位置する今立郡池田町で話される福井県嶺北方言の一変種である。

(1) 池田町方言の方言区画・系統上の位置付け

西日本方言　――　北陸方言　――　福井県嶺北方言　――　池田町方言

福井県池田町は，福井市中心部から南東へ約 30km 離れた農山村である。足羽川とその支流に沿って形成された小さな盆地地形におよそ 33 の集落が散在している。主な産業は稲作を中心とする農業で，古くは炭焼きも行われた（町面積の 9 割以上を山林が占める）。四方を山地に囲まれ，周辺とは地理的にやや隔絶された地域であるが，北に接する福井市美山地区（旧足羽郡美山町）や西に接する越前市（旧武生市・旧今立郡今立町）とは道路事情が良く人的交流も盛んである。人口は約 2400 人（2022 年 1 月時点）で，高齢化率は県内で最も高く 44.77%（20 年 4 月 1 日時点）に上る[1]。

池田町を含む福井県嶺北地方（福井県の北東部）内部の文法・語彙面での地域差はあまり大きくなく，その面では池田町方言も福井・武生・大野等の近隣の市街地の方言と大きく異なる所はない。よって本稿で述べる文法的特徴の多くは池田町方言に限らず嶺北方言全体にあてはまるものである。池田町方言の独自性を特徴付けるのはそのアクセント体系で，周辺方言とは異なる当地固有の体系が確認されている（2.3 節で概説）。

池田町方言は音韻・形態・統語どの面においても共通語（口語）と同じ特徴を大部分共有していると見られる。以下に方言学上の主要な類型論的特徴をいくつか列挙してみる：

【音韻】

①短母音音素は 5 つ：/i/, /u/, /e/, /o/, /a/。いわゆる広いエ（ɛ や æ）はない。中舌母音も聴かれない

②子音音素の数は解釈の仕方によって変わり得るがおおよそ次の 18 種類が立てられる：/p, b, m, t, d, n, c, s, z, r, k, g, ŋ, h, w, j, N, Q/（/c/ は歯茎破擦音，/N/ は撥音，/Q/ は促音）

③開音節（CV, CVV など）が基本の音節構造で，閉音節は音節末が /N/ か /Q/ の場合のみ可能

④アクセントの区別は明瞭。下がり目の位置が区別される

* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」および JSPS 科研費 19J00755 の助成を受けたものである。

[1] 人口・高齢化率は池田町公式 HP に拠る。
https://www.town.ikeda.fukui.jp/gyousei/gyousei/1921/p001487.html（2021 年 8 月 27 日閲覧）

⑤アクセント核を担う単位はモーラや音節ではなく「フット」であると分析される

【文法】

⑥名詞は屈折（語形変化）しない。名詞語幹と接辞が形態的に融合する現象もほぼない。文法的意味を表すには助詞（後置詞）を後接させる方法を採る

⑦動詞・形容詞には，語幹に様々な接尾辞が付いて時制・態・極性などを表す語形変化が見られる。膠着的で形態素境界は明瞭である。動詞には語幹末が子音の「子音語幹動詞」（*kak-*‘書く’など）と語幹末が i または e の「母音語幹動詞」（*mi-*‘見る’など）の 2 種類の規則的な活用パターンがある

⑧格標示のアラインメントは対格型（S, A は *=ŋa*, P は *=o* で標示）と中立型（全てゼロ標示）の混用

⑨状況可能と能力可能の区別はない（接辞 *-(r)e-* で可能動詞を派生させる形式のみ）

⑩進行相と結果相が同じ形式で表される（どちらも～テルの形）

以上挙げた中では，共通語と異なる特徴は⑤のみである。

本報告の池田町方言の記述は 2016 年 12 月～2019 年 9 月に池田町西角間出身・在住の山口哲夫氏（1936 年生）と話者宅で面談し実施した聴き取り調査に基づく。また 2018 年 1 月には山口氏と 2 名のご隣人・ご友人（1929 年生男性，1934 年生男性）を交えた 3 名での自由談話を 90 分程度収録しており，ここから用例を引くことがある。

2. 音韻論

2.1 音素目録

2.1.1 母音音素

短母音音素は /i/, /u/, /e/, /o/, /a/ の 5 種類ある。/u/ は唇の丸めが弱くやや中舌寄りである。長母音音素は /i:/, /u:/, /e:/, /o:/, /a:/ の 5 種類あり母音の質は短母音と変わりない。

表 1　短母音体系

	前舌	奥舌
狭	i	u
半狭	e	o
広	a	

表 2　長母音体系

	前舌	奥舌
狭	i:	u:
半狭	e:	o:
広	a:	

内容語は 2 モーラ以上の長さで実現しなければならないという（文節を領域とした）最小語制約（McCarthy & Prince 1996）があり，1 モーラ名詞は付属語を伴わない場合 2 モーラの長さに発音される：*/tó/*[2] [to:]‘戸’（cf., */tóŋa/* [toŋa]‘戸が’）。そのため単語単独の発音においては */tó/*

[2] acute accent (ˊ) はアクセント核（2.3 節）を表す。

[to:]‘戸’のような 1 モーラ語と */tó:/* [to:]‘10’のような本来的な 2 モーラ語との見分けがつかない。

無声子音に挟まれた狭母音（/i/, /u/）の無声化は盛んに生じる。特に無声摩擦（破擦）音の直後かつ無声破裂音の直前にある狭母音の無声化は義務的に生じる（*/síto/* [ɕi̥to]‘人’, */cíkara/* [tɕi̥kaɾa]‘力’など）。無声子音の直後かつ発話末にある狭母音も無声化することがある（*/ríkuci/* [ɾikutɕi̥]‘陸地’, */ní:niki/* [ni:nik̟i̥]‘にんにく’）。

2.1.2 子音音素

子音音素は /p, b, m, t, d, n, c, s, z, r, k, g, ŋ, h, w, j, N, Q/ の 18 種類ある。/N/ は撥音，/Q/ は促音に対応する音素として設定する。

表 3　子音体系

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂	無声	p	t		k [k ~ g]	
	有声	b	d		g	
鼻音		m	n		ŋ	
摩擦	無声		s [s ~ ɕ]			h [h ~ ɦ ~ ç ~ ɸ]
	有声		z [z ~ ʣ ~ ʒ ~ ʤ]			
破擦	無声		c [ʦ ~ tɕ]			
はじき			r [ɾ ~ r]			
接近		w		j		

2.1.2.1 位置の制限

- /N/, /Q/ は音節末尾にしか現れない
- /N/ は /m/, /n/ の前でのみ語頭に現れ得る（*/Nmeru/* [m̩meɾu]‘見える’など）
- /p/ は外来語やオノマトペを除くと語頭には現れない。語中の /p/ も外来語・オノマトペを除くと基本的に /N/, /Q/ の直後にしか現れない（*/anaNpo/* [anampo]‘穴’, */siQpo/* [ɕippo] ‘しっぽ’など）
- /g/ は外来語やオノマトペ・畳語を除くと語中には現れない（*/girigíri/* [gi̥ɾigi̥ɾi]‘つむじ’は数少ない語中の /g/ の例）
- /ŋ/ は語頭には立たない

2.1.2.2 結合の制限

- /t/, /d/ は 母音 /e/, /o/, /a/ と結びつくが /i/, /u/, /j/ とは結びつかない
- /j/ は /u/, /e/, /o/, /a/ と結びつくが /i/ とは結びつかない
- /w/ は /a/ と結びつくが /i/, /u/, /e/, /o/, /j/ とは結びつかない

2.1.2.3 異音

・/s/ は /u/, /o/, /a/ の前で [s], /i/, /j/ の前で [ɕ] である 。/se/ は [ɕe] が旧来の発音であるが現在は本稿の話者を含め高年層でも口蓋化せず [se] に発音する話者も多い

[s]: */sé/* [seː]‘背’, */usaŋi/* [usaŋi]‘兎’

[ɕ]: */síraŋa/* [ɕiraŋa]‘白髪’

・/z/ は /u/, /o/, /a/ の前で [z ~ dz], /i/, /j/ の前で [ʑ ~ dʑ] である（摩擦音か破擦音かは自由変異）。/ze/ は [ʑe] が旧来の発音であるが /se/ と並行して世代が下るほど [ze] に変わりつつある

[z]: */mízu/* [mizu]‘水’, */káze/* [kaze]‘風’, */káza/* [kaza]‘匂い’

[ʑ]: */hazisi/* [haʑiɕi]‘歯茎’

・/c/ は /u/, /e/, /o/, /a/ の前で [ʦ], /i/, /j/ の前で [ʨ] である

[ʦ]: */oQca/* [ottsa]‘お父さん’, */ceNbái/* [ʦembai]‘杖’, */goQco/* [gottso]‘ごちそう’

[ʨ]: */cí/* [ʨiː]‘血’

・/r/ は歯茎はじき音 [ɾ] あるいは自由変異として歯茎ふるえ音 [r] も聴かれる

・/k/ は自由変異として母音間で有声化し [g ~ ɣ] となることがある

[g ~ ɣ]: */hókori/* [hoɣoɾi]‘埃’, */sákana/* [sagana]‘魚’

・/h/ は /e/, /o/, /a/ の前で [h], /i/, /j/ の前で [h ~ ç], /u/ の前で [ɸ] である。[h] は母音間で有声化して [ɦ] となることもある

[h ~ ɦ]: */hóːke/* [hoːke]‘箒’, */háeme/* [haeme]‘蝿’, */ohisáN/* [oɦisaɴ]‘太陽’

[ç]: */híma/* [çima]‘暇’

[ɸ]: */hune/* [ɸune]‘船’

・/N/ は発話末で [ɴ]。子音の直前ではその子音と同じ調音位置の鼻音，母音・接近音の直前では鼻母音になる

[ɴ]: */míkaN/* [mikaɴ]‘蜜柑’

[m]: */náNba/* [namba]‘唐辛子’

[n]: */gaNdo/* [gando]‘鋸’

[ŋ]: */baNko/* [baŋko]‘厚板’

2.2 音節構造とモーラ

本方言の音節構造を表 4 に示す。ここでは O は onset, G は glide, Nu は nucleus, Co は coda を表す。

表 4　音節構造

O	G	Nu	Co
/p, t, k, b, d, g/ /m, n, ŋ/ /s, z, c, h, r, w/	/j/	/i, u, e, o, a/ /iː, uː, eː, oː, aː/ /ai, oi, ui/ /N/	/N/ /Q/

/t/, /d/, /w/ を除く頭子音と /i/ を除く母音の間にはわたり音 /j/ が入り得る。k^w, g^w（いわゆる合拗音）など唇音化した子音はない。/N/ は語頭に現れた時のみそれ単独で 1 つの音節を形成する。尾子音となり得る子音音素は /N/, /Q/ のみである。

アクセントの観察に基づき，長母音音素と 3 種の母音連続（/ai/, /oi/, /ui/）は同一音節にまとまりまた 2 モーラ分の長さを有することが明らかになっている。coda の/N/, /Q/ もまた 1 モーラ分の長さを持つ。ほとんどの音節は最大 2 モーラまでの長さに収まり，3 モーラの超重音節は稀である（*me:Qko* [me:kko]‘姪っ子’，*tó:Qta* [to:tta]‘通った’，*kúre:N* [kuɾe:ɴ]‘クレーン’など長母音＋/N/ or /Q/ の確例はあり。/ai/, /oi/ or /ui/ + /N/ or /Q/ が 1 音節にまとまるかは未詳）。

表 5　音節一覧

構造	語例
Nu	*e*‘絵’ *i.to*‘糸’ *Ń.ma*‘馬’
GNu	*ju*‘湯’ *jái.to*‘灸’
ONu	*ká*‘蚊’ *ké.ŋa*‘怪我’
OGNu	*kjo:*‘今日’*zái.sjo*‘集落’
NuCo	*éN.me*‘犬’ *íQ.ke*‘親戚’
GNuCo	*joN.be*‘夕べ’ *jáQ.cu*‘八つ’
ONuCo	*nóN.me*‘蚤’ *naQ.pa*‘菜’
OGNuCo	*aN.cjáN*‘兄’ *cjoQ.to*‘ちょっと’

2.3 アクセント

池田町方言のアクセント体系は，ピッチの下降の位置が区別される体系である。アクセント核を担う韻律単位は 2 モーラフットであり，語頭から数えて何番目のフットがアクセント核を担うかが区別される[3]（松倉 2018）。2 フット以下（およそ 5 モーラ以下）の語においては 1 つ目のフットに核がある型と 2 つ目のフットに核がある型の 2 通りの対立しかなく，3 フット以上（およそ 6 モーラ以上）の長さになってようやく第 3 の型（3 つ目のフットに核がある型）が現れる。短い語，単純語に関する限りは実質的に「二型アクセント[4]」と言える体系である。

[3] 本稿で想定するアクセント体系の枠組みの正否については本来ならば対案を複数挙げた上でより詳細に検証する必要があるが，本稿の目的は簡易的な文法記述を行うことにあるためここではあまり紙面を割かず，現時点で最も妥当かと考えている仮説（松倉 2018 の分析を修正したもの）を示すにとどめる。詳細な議論は後の機会に譲りたい。

[4] 語の長さにかかわらず型の対立数が（最大で）2 種類しかない体系（上野 1984）。鹿児島市方言，長崎市方言といった九州西南部方言の例がよく知られるが，福井県嶺北地方の一部地域にも「三国式アクセント」と呼ばれる二型アクセントが存在する（佐藤 1983, 松倉 2014 など）。この三国式と池田町方言の体系は全く別種の体系である（共時的な枠組みも類別語彙との対応関係も全く異なる）。

表 6　1~3 フット名詞のアクセント型

型	1 フット	2 フット	3 フット
1	*jáma*‘山’	*káminari*‘雷’	*hátarakikata*‘働き方’
2	*mado*‘窓’	*murasáki*‘紫’	*kanakíriŋoe*‘金切声’
3			*kaminariŋúmo*‘雷雲’

本稿ではアクセント核のあるモーラを acute accent (ˊ) で示す。核の置かれるモーラの直後にピッチの下降が生じ，例えば *káminari* は第 1 モーラが高い [kámìnàrì], *murasáki* は句頭では第 2 モーラから高い [mùrásákì] となる。

第 2 フットに核がある型は，語（文節）の長さが 2 フットに満たない場合，どこにも下降が生じない無核型のように振舞い（*mado* は [màdó]），助詞等を後接させ 2 フット以上の文節を作ると 2 フット目に下降が現れる。このように名詞・動詞等のアクセントが後続する助詞内部に実現することがある。

表 7　1 フット名詞（+ *ŋa, kara, kara mo*）のアクセント

型	語例	+ *ŋa*	+ *kara*	+ *kara mo*
1	*ká*‘蚊’	*ká=ŋa*	*ká=kara*	*ká=kara=mo*
1	*jáma*‘山’	*jáma=ŋa*	*jáma=kara*	*jáma=kara=mo*
1	*sákana*‘魚’	*sákana=ŋa*	*sákana=kara*	*sákana=kara=mo*
2	*me*‘芽’	*me=ŋa*	*me=kara*	*me=kará=mo*
2	*mado*‘窓’	*mado=ŋa*	*mado=kára*	*mado=kára=mo*
2	*hatake*‘畑’	*hataké=ŋa*	*hatake=kára*	*hatake=kára=mo*

フットと，フットの形成領域としての韻律語の形成規則を次のように仮定する。

(2) 韻律語形成規則

a.　2 モーラ以上の形態素及び 1 モーラ形態素の連続[5]は独自の韻律語を形成する

b.　1 モーラの語根・接頭辞は直後に続く形態素と同じ韻律語に組み込まれる

c.　1 モーラの語根は直後に別の形態素が続かない場合 1 モーラの韻律語を形成する

d.　1 モーラの後接語（助詞）・接尾辞は直前の形態素と同じ韻律語に組み込まれる

(3) フット形成規則

a.　韻律語内部で左端から右方向へ 2 モーラフットを形成する

[5] 「1 モーラ助詞＋1 モーラ助詞」や「1 モーラ語根＋1 モーラ助詞」など。

b. フット境界が音節境界と一致しない（音節内部にフット境界が来てしまう）場合，3 モーラフットを形成する

c. 1 モーラフットは形成しない

表 8　韻律語・フットの形成過程①（単純語＋助詞）

	mado=ŋa	*hataké=ŋa*	*hatake=kára*	*me=kará=mo*	*mado=kára=mo*
(2a)	{mado}ŋa	{hatake}ŋa	{hatake}{kara}	me{kara}mo	{mado}{kara}mo
(2b)	↓	↓	↓	{mekara}mo	↓
(2c)	↓	↓	↓	↓	↓
(2d)	{madoŋa}	{hatakeŋa}	↓	{mekaramo}	{mado}{karamo}
(3)	(mado)ŋa	(hata)(kéŋa)	(hata)ke(kára)	(meka)(rámo)	(mado)(kára)mo

※{ } は韻律語，( ) はフットを表す

表 9　韻律語・フットの形成過程②（4 モーラ名詞）

	oreNzi ‘オレンジ’	*hari+ŋáne* ‘針金’	*otoko+ju* ‘男湯’	*me+ŋusúri* ‘目薬’
(2a)	{oreNzi}	{hari}{ŋane}	{otoko}ju	me{ŋusuri}
(2b)	↓	↓	↓	{meŋusuri}
(2c)	↓	↓	{otoko}{ju}	↓
(2d)	↓	↓	↓	↓
(3)	(oreN)zi	(hari)(ŋáne)	(oto)koju	(meŋu)(súri)

※ + は語根境界を表す

(2c) と (3c) により，*otokoju*‘男湯’は全体として 1 フット語になる（‘男湯’単独の発音はどこにも下降が生じない [òtókójú]）。ただしこれに助詞が後続すると (2ab) に従い語根＋助詞で 2 モーラ以上の韻律語が形成され文節全体として 2 フット長になる（{otoko}{juŋa} → (oto)ko(júŋa)‘男湯が’）。

(3b) が関わるのは主として 2, 3 モーラ目が 1 つの音節にまとまる（3 モーラ目がいわゆる特殊拍にあたる）場合で，例えば *oreNzi*‘オレンジ’は音節境界をまたぐ *(ore)(Nzi) のようなフット構造が許容されないため，(oreN)zi のような 3 モーラフットが形成される。4 モーラの長さがありながら 2 フットには満たない音節構造で，‘オレンジ’単独の発音はどこにも下降が生じない [òɾéńʣí] である。母音＋/N/, /Q/ の他，長母音や /ai/, /oi/, /ui/ の内部にも基本的にフット・音節境界は置かれない。 *kuri:mu* [kùrí:mú]‘クリーム’, *guraidá:* [gùɾáidá:]‘グライダー’, *aruita* [àrúítá]‘歩いた’は全て‘オレンジ’と同様に語頭 3 モーラが 1 音節・1 フットを形成する例である。ただし *manaíta* [mànáítà]‘まな板’のように複合語の語根境界をまたいだ ai, oi, ui は 1 音節にはまとまらない。

3. 名詞の形態論

3.1 名詞の内部構造

3.1.1 単数と複数

人称代名詞と有生名詞には接辞 *-ra* が付き複数を表す。無生名詞には複数接辞 *-ra* は付かない。人称代名詞における数標示は義務的であるが普通名詞については義務的ではない (4)(5)。

(4) *nekomé-ra=ŋa* *gjoːsáN* *ácumaQ-te-ru*
猫-PL=NOM1 たくさん 集まる-PERF-NPST
‘猫たちがたくさん集まってる’

(5) *nekomé=ŋa* *gjoːsáN* *ácumaQ-te-ru*
猫=NOM1 たくさん 集まる-PERF-NPST
‘猫がたくさん集まってる’

-ra は純粋複数と近似複数の両方を表し，(4) の *nekomé-ra* は「複数の猫」の意味にも「猫とその他の動物たち」といった意味にも取れる。

一部の代名詞（*ura*‘私’と *ware*‘お前’）には単数形と複数形の間に不規則なアクセント交替が見られる（3.2.1 参照）。

3.1.2 接辞

名詞を派生する接辞は専ら接尾辞が多く接頭辞は少ない。最頻出の接頭辞は美化語を作る *o-* であろう (6)。

(6a) *o-cuju*‘汁物’，*o-iwái*‘お祝い’，*o-kai*‘粥，雑炊’，*o-toQcáN*‘夫’
(6b) *o-cuki-sáN*‘月’，*o-hi-sáN*‘太陽’，*o-hoQ-sáN*‘星’

(6b) は天体名に *o-* と敬称を表す接尾辞 *-saN* が付いた例である。

池田町方言に特徴的な接辞としては，動物名に付く接尾辞 *-me* が挙げられる。基礎語彙調査の範囲内だけでも以下のような例を確認している。動物名を洗いざらい調べれば語例はもう少し増えるであろう。

(7) *ári-me*‘蟻’，*éN-me ~ ínu-me*‘犬’，*gjaru-me*‘蛙’，*háci-me*‘蜂’，*háe-me*‘蠅’，*neko-me*‘猫’，*nóN-me*‘蚤’，*tóNbi-me*‘鳶’，*tóri-me*‘鳥’，*úsi-me*‘牛’，*zako-me*‘魚’

動物名であれば *-me* が付き得るわけでは必ずしもなく，むしろ付かない語の方が多い（**Ńma-me*‘馬’，**usaŋí-me*‘兎’，**úzi-me*‘蛆’，**karasú-me*‘烏’などは不可）。 また (7)

に挙げた動物名は *éN-me* と *nóN-me* を除けば全て *-me* が付かない語形も併用する（**éN* や **nóN* という語形はないが*ári* や *ínu* は可）。*-me* が付く語と付かない語を分ける音韻的・意味的な基準は特定できない。また *-me* 自体はもはや何ら特定の意味・機能（蔑称や愛称など）を持たない。現在は全く生産性を失った接辞である。

なおこの動物名に付く *-me* は近隣の方言にも存在が報告されており，池田町の南に隣接する岐阜県揖斐郡方言（山田 1984）や石川県の南端にある白山市白峰方言（新田 2006）にもウシメ，トリメといった語形が豊富に存在する。

3.2 代名詞の構造と体系

3.2.1 人称代名詞の体系

1 人称代名詞は話し手の性別，2 人称代名詞は聞き手に対する敬意度により 3, 4 種類の形式を使い分ける。最も一般的な 1 人称代名詞は *ura* で，これは男女ともに用いる。この他女性が用いる 1 人称代名詞に *wate* や *waQci* がある。

2 人称代名詞は *áNta* > *wa:mi* > *omae* > *ware* の順に聞き手への敬意度が高い。もっとも，目上の相手を指すには代名詞ではなくその人の職業身分や親族呼称（*goeNsáN*‘住職’，*ojaQsáN*‘家長’，*toQcáma*‘お父さん’など）を用いる方が普通である。

複数形は接辞 *-ra* で作る。1, 2 人称代名詞においては数の標示は義務的である。一点注意すべきは *ura* と *ware* のアクセントで，複数形が単数形とは異なるアクセント型に交替する。単数形にはないアクセント核が第 1 フット（第 1 モーラ）に現れるのである。このような不規則な交替は他の代名詞には生じない。なお 1 人称複数に包括／除外の区別はない。

3 人称代名詞には次項に示す指示代名詞（中称・遠称）が代用される。

表 10　人称代名詞の体系

人称・性	聞き手	単数	複数
1 人称		*ura*	*úra-ra*
1 人称女性		*wate*	*wate-ra*
		waQci	*waQcí-ra*
2 人称	目下	*ware*	*wáre-ra*
	やや目下	*omae*	*omaé-ra*
	対等	*wa:mi*	*wa:mí-ra*
	やや目上	*áNta*	*áNta-ra*

3.2.2 指示代名詞の体系

指示代名詞（指示詞）には共通語と同様に *ko-, ho- (so-), a-* の 3 つの系統がある。中称の 2 つの形式（*ho-* と *so-*）は自由変異であり完全に互換可能である。文法的意味を表す形態素には s > h の変化（s ~ h の交替）が多く見られこれもその一例である。場所を表す *koko, hoko ~ soko, ako ~ aQko ~ asoko* のみ他とアクセントが異なることに注意を要する。

人を指す場合は *kóre, hóre (sóre), áre* よりも *kóno kó*‘この子’, *hóno síto*‘その人’のような連体詞＋名詞の表現を採る方が多い。

表 11　指示代名詞（指示詞）の体系

	近称 *ko-*	中称 *ho-, so-*	遠称 *a-*	不定称 *do-*
物・人	*kóre*	*hóre, sóre*	*áre*	*dóre*
連体・指示（～の）	*kóno*	*hóno, sóno*	*áno*	*dóno*
連体・様態（～のような）	*kóNna*	*hóNna, sóNna*	*áNna*	*dóNna*
副詞（～のように）	*kó:*	*hó:, só:*	*á:*	*dó:*
場所	*koko*	*hoko, soko*	*ako, aQko, asoko*	*dóko*

3.2.3　数詞の体系

数詞には和語系と漢語系の 2 つの系列がある。和語系は主として接辞 *-cu* を伴う形で用いられ，その他の場合は漢語系の数詞が用いられる（ただし‘4’は和語系の *jo(N)-* も混用）。

表 12　和語系数詞の例

	-cu（個数）	*-ri*（人数）
1	*hito-cu*	*hito-ri*
2	*huta-cu*	*huta-ri*
3	*míQ-cu*	*(saN-níN)*
4	*jóQ-cu*	*(jó-niN)*
5	*ícu-cu*	*(gó-niN)*
6	*múQ-cu*	*(róku-niN)*
7	*nána-cu*	*(híci-niN)*
8	*jáQ-cu*	*(háci-niN)*
9	*kókono-cu*	*(kú-niN)*
10	*tó:*	*(zjú:-niN)*

※「3 人」以上は漢語系の数詞・助数詞が用いられる

表 13　漢語系数詞の例

	単独形	*-mai*‘枚’ *-niN*‘人’	*-hai*‘杯’	*-zjo:*‘畳’	*-me:toru* ‘メートル’	*-ŋacu*‘月’
1	*íci*	*íci-mai*	*iQ-pái*	*ici-zjó:*	*ici-mé:toru*	*ici-ŋácu*
2	*ni*	*ni-mai*	*ni-hai*	*ni-zjo:*	*ni-me:tóru*	*ní-ŋacu*
3	*sáN*	*saN-mái*	*saN-bái*	*saN-zjó:*	*saN-mé:toru*	*saN-ŋácu*
4	*si*	*(jóN-mai)*	*si-hai* *(jóN-hai)*	*(jóN-zjo:)*	*(joN-mé:toru)*	*sí-ŋacu*
5	*gó*	*gó-mai*	*gó-hai*	*go-zjo:*	*go-me:tóru*	*gó-ŋacu*
6	*roku*	*róku-mai*	*roQ-pái*	*roku- zjó:*	*roku-mé:toru*	*roku-ŋácu*
7	*hici*	*híci-mai*	*híci-hai*	*híci-zjo:*	*hici-mé:toru*	*hici-ŋácu*
8	*haci*	*háci-mai*	*háci-hai*	*háci-zjo:*	*haci-mé:toru*	*haci-ŋácu*
9	*kjú:, kú*	*kú-mai*	*kú-hai*	*kjú:-zjo:*	*kju:-mé:toru*	*kú-ŋacu*
10	*zju:*	*zjú:-mai*	*zjuQ-pái*	*zju:-zjó:*	*zju:-mé:toru*	*zjú:-ŋacu*

「数詞＋助数詞」のアクセントは（他の多くの方言と同様に）かなり複雑で，しばしば不規則的で記憶負担が大きい。表 13 に挙げた中で最も単純な助数詞は *-me:toru* で，全て第 2 フットに核がある型に一貫している（数詞が 1 モーラならば*...me:tóru*, 2 モーラならば*...mé:toru*）。

3.3 格の種類と機能

名詞の格は名詞に助詞（後置詞）を付けて表す。ただし助詞が付かない形で文中に現れることもある。無助詞の場合も含めてそれぞれの形式の意味・機能を概説する。

表 14　格の一覧（ゼロ標示を含む）

	格の名称	意味
=∅	（ゼロ格）	主語，目的語，方向・着点，経路
=ŋa, =a	主格	主語
=o	対格	目的語，経路
=no, =N	属格	所有者，同格，連体節の主語
=ne, =ni, =N	与格／位格	受益者，受身・使役文の動作主，経験者，変化の結果，存在の場所，時間
=de	具格	道具・手段，出来事の場所
=e	方位格	方向・着点
=kara	起点格	起点
=made	限界格	限界点
=to	共同格	共同の相手
=jori	比較格	比較の基準
=ŋata	比較対象格	比較の対象（比較文の主語）

3.3.1 ゼロ格

ゼロ格形は連体節以外の従属節と主節の主語や目的語 (8)，方向・着点 (9)，経路 (10) を表し得る。

(8) *héja=N* *naka* *mí-tara* *taro:* *cukue* *hákoN-de-ta*
部屋=GEN 中=∅ 見る-COND2 太郎=∅ 机=∅ 運ぶ-PROG-PST
‘部屋の中を見たら太郎が机を運んでいた’

(9) *kíNno* *gaQkó:* *íQ-ta=N=ka*
昨日 学校=∅ 行く-PST=NMLZ=QP
‘昨日学校へ行ったの？’

(10) *hási* *wátaQ-teQ-ta*
橋=∅ 渡る-GER.行く-PST
‘橋を渡って行った’

(8) の主語 *taro:* は主格形 *taro:=ŋa*，目的語 *naka, cukue* は対格形 *naka=o, cukué=o* と互換可能である。(9) の *gaQkó:* は方位格形 *gaQkó:=e*，(10) の *hási* は対格形 *hási=o* に置き換えられる。

ゼロ格でなければならない（＝主格形も対格形も主題を表す *=wa* が付いた形も不可）という例については追究できていない（そこまで調査が及んでいない）が，自由談話を聴く限り，話し手が主題の文や眼前の事物について述べる文では共通語と同様にゼロ格が現れるようである (11)(12)。

(11) *ódoQ-te-ta=no=o* *ura* *mí-te-ta* *óboe=ŋa*
踊る-PROG-PST=NMLZ=ACC 1SG=∅ 見る-PROG-PST 覚え=NOM1
ar-u
ある-NPST
‘踊ってたのを私，見てた覚えがある’

(12) *Nde* *kóno:* *kóre* *cjoQto* *iko*
それで FIL これ=∅ ちょっと 大きい.ADVZ
sí-ta=N=nja=kedo
する-PST=NMLZ=COP=CONC
‘それでこれ（＝手元の写真）ちょっと大きくしたんだけど’
（サイズを大きくした写真を聞き手に見せながらの発話）

逆にゼロ格が不可・不自然になるケースは次の 3.3.2, 3.3.3 で取り上げる。

3.3.2 主格（*=ŋa, =a*）

主格形には 2 つの形式（*=ŋa, =a*）があり，このうち *=ŋa* は焦点化された主語を表す。*=a* は焦点の有無にかかわりなく主語を表す (13)(14)(15)。「*=ŋa* を伴う主語名詞句は焦点化されている」は常に成り立つが，その逆「焦点化された主語名詞句は *=ŋa* を伴う」は必ずしも成り立たない。多くの場合主格形はゼロ格形と互換可能である (14)(15)。

(13) *oteNkí=ja* *ano* *kaNbácu=a* *cúzuk-u=to=no*
晴天=LST FIL 旱魃=NOM2 続く-NPST=COND=SFP
asokó=e *ano* *amaŋói=ni* *áŋaQ-ta=N=ja*
あそこ=ALL FIL 雨乞い=DAT 上がる-PST=NMLZ=COP
‘晴天や旱魃が続くとねあそこへ雨乞いに上がったんだ’

(14) *héja=N* *naka* *mí-tara* *taro:{=∅/=ŋa/=a}*
部屋=GEN 中=∅ 見る-COND2 太郎{=∅/=NOM1/=NOM2}
taoré-te-ta
倒れる-PERF-PST
‘部屋の中を見たら太郎が倒れていた’

(15) *A:* *ame* *huQ-tá=ke=no*
雨=∅ 降る-PST=QP=SFP
B: *ame=a* *hur-anáNda*
雨=NOM2 降る-NEG.PST
（話者 A）‘雨は降ったかね’
（話者 B）‘雨は降らなかった’

主語を主格形（*=ŋa, =a*）で有形標示することが義務的（ゼロ格が不適格）になる環境が少なくとも次の 4 つある：①WH 疑問文に対する回答部分 (16b)；②対比焦点化された主語 (17)；③コピュラ文の焦点化された主語 (18)；④形式名詞ではない名詞を修飾する連体節の主語 (19)。

(16a) *dáre{=∅/=ŋa/=a}* *nái-te-ru=N=zja*
誰{=∅/=NOM1/=NOM2} 泣く-PROG-NPST=NMLZ=COP
‘誰が泣いてるの’

(16b) (16a) に対する回答として

taro:{#=∅/#=wa/=ŋa/=a} *nái-te-ru*

太郎{#=∅/#=TOP/=NOM1/=NOM2} 泣く-PROG-NPST

‘太郎が泣いてる’

(17) *ura=de* *nó:-te*

1SG=COP.GER ない-GER

taro:{=∅/=ŋa/=a}* *hákoN-de-ta=wa*

太郎{*=∅/=NOM1/=NOM2} 運ぶ-PROG-PST=SFP

‘私じゃなくて太郎が運んでいたわ’

(18a) *dáre{*=∅/=ŋa/=a}* *sueQkó=na=N=zja*

誰{*=∅/=NOM1/=NOM2} 末っ子=COP.ADN=NMLZ=COP

‘誰が末っ子なの’

(18b) (18a) に対する回答として

taro:{#=∅/=ŋa/=a} *sueQkó=zja*

太郎{#=∅/=NOM1/=NOM2} 末っ子=COP

‘太郎が末っ子だ’

(19) *taro:{*=∅/=ŋa/=no}* *hákoN-da* *cukué=wa* *dóre=zja*

太郎{*=∅/=NOM1/=GEN} 運ぶ-PST 机=TOP どれ=COP

‘太郎が運んだ机はどれだ’

(19) のように連体節の主語は主格（*=ŋa*）の他，属格（*=no*）で標示することも可能である。

主格形とゼロ格形の使い分けに，主語名詞句の有生性，述語との距離，（連体節以外の）従属節か主節かといった要因は関与しないようであった。

3.3.3 対格（*=o*）

対格形（*=o*）は（直接）目的語や経路を表す。ほとんどの環境でゼロ格形と互換可能であるが，確認している範囲内では，1 人称代名詞が目的語である場合のみ *=o* の標示が義務的になる (20)。この他には，対格形とゼロ格形の使い分けに関する明確な基準は見つかっていない。調査ではゼロ格形の回答を得る方が多いが，対格形の使用が方言として不自然ということは全くなく自由談話の中でも *=o* で標示された目的語の例は高頻度に現れる (21)(22)。ゼロ格形の方が書き言葉とは異なる，より口語的・方言的な表現という印象があるために調査時にはゼロ格形の方が選好されるのかもしれない。

(20a) *taroː=ŋa* *ura{=o/*=∅}* *sáŋai-te-ta*
太郎=NOM1 1SG{=ACC/*=∅} 探す-PROG-PST
‘太郎が私を探していた’

(20b) *taroː=ŋa* *omaé{=o/=∅}* *sáŋai-te-ta*
太郎=NOM1 2SG{=ACC/=∅} 探す-PROG-PST
‘太郎がお前を探していた’

(21) [...] *mízu=o* *kúre-na* *ák-aN=de* *íQ-ta*
水=ACC くれる-NEG.COND1 明く-NEG=CSL 行く-PST
Qcjú-u=N=de *na-sini* [...]
QUOT.言う-NPST=NMLZ=COP.GER 無い-ADVZ
‘[...]水をくれなきゃいけないから行ったというのではなく[...]’

(22) *áre=o* *táiko=o* *Ńno-te*
あれ=ACC 太鼓=ACC 担ぐ-GER
áŋaQ-ta=N=nja=wa=no
上る-PST=NMLZ=COP=SFP=SFP
‘あれ（＝茅場へ上る道）を太鼓を担いで上ったんだね’

主格形の場合と異なり焦点の有無は両形の使い分けに関与しない。WH 疑問文に対する回答部分であれ (23b)，対比焦点化された目的語であれ (24)，*=o* の標示が義務的になることはない。非焦点環境と変わらずゼロ格形の方が第一回答として得られる。

(23a) *nani* *wáQ-ta=N=zja*
何=∅ 割る-PST=NMLZ=COP
‘何を割ったの’

(23b) (23a) に対する回答として
cjawaN *wáQ-ta=N=zja*
茶碗=∅ 割る-PST=NMLZ=COP
‘茶碗を割ったんだ’

(24) *sára=de* *nóː-te* *cjawaN* *wáQ-ta=N=zja*
皿=COP.GER 無い-GER 茶碗=∅ 割る-PST=NMLZ=COP
‘皿でなくて茶碗を割ったんだ’

3.3.4 属格（*=no, =N*）

属格形は連体修飾を表す他，連体節の主語を表し得る (19)。一部の形式名詞やそれに近い名詞を修飾する場合に限り *=N* という形態を取ることがある（例：*taroː=N tóko*‘太郎の所（＝太郎の家）’；*héja=N naka*‘部屋の中’）。

3.3.5 与格・位格（*=ne, =ni, =N*）

共通語と同じくこの形式のカバーする意味・機能は非常に幅広く，受益者 (25)(26)(27)，受身・使役文の動作主 (28)(29)，経験者 (30)，変化の結果 (31)，存在の場所，時間を表す。*=ne* と *=ni* は自由変異の関係にある。動詞 *nar-*‘なる’の直前では *=N* という形態を取る。

(25) *óto:to{=ne/=e}* *zibuŃ=no* *tóci=o* *jáQ-ta*
弟{=DAT/=ALL} 自分=GEN 土地=ACC 遣る-PST
‘弟に自分の土地をあげた’

(26) *óto:to{=ne/=e}* *okané=o* *ókuQ-ta*
弟{=DAT/=ALL} お金=ACC 送る-PST
‘弟にお金を送った’

(27) *óto:to{=ne/*=e}* *ehoŃ=o* *joN-de* *jáQ-ta*
弟{=DAT/*=ALL} 絵本=ACC 読む-GER 遣る-PST
‘弟に絵本を読んであげた’

(28) *óto:to{=ne/*=kara}* *náŋur-are-ta*
弟{=DAT/*=ABL} 殴る-PASS-PST
‘弟に殴られた’

(29) *óto:to=ne* *jasaí=o* *kúw-as-i-ta*
弟=DAT 野菜=ACC 食べる-CAUS-EP-PST
‘弟に野菜を食べさせた’

(30) *taroː=ní=wa* *ura=no* *kimocí=ŋa* *wakar-áN*
太郎=DAT=TOP 1SG=GEN 気持ち=NOM1 わかる-NEG
‘太郎には私の気持ちがわからない’

(31) *taroː=wa* *seNséː=N* *naQ-ta*
太郎=TOP 先生=DAT なる-PST
‘太郎は先生になった’

所有権や具体物の移動を伴う授受行為の受益者は方位格（=*e*）で標示することもできるが (25)(26)，そうでない場合，方位格は不適格になる (27)。

3.3.6 方位格（=*e*）

移動目標・着点は方位格（=*e*）で標示する。位格（=*ne*, =*ni*）は使いにくい (32)。ただし《移動の結果》が含意される場合は位格標示も可能になる (33)。また物理的な移動だけでなく所有権の移動の着点（すなわち受益者）も方位格で表せる (25)。

(32) *taroː=wa* *tóːkjoː{=e/*=ni}* *dékake-ta*
太郎=TOP 東京{=ALL/*=LOC} 出かける-PST
‘太郎は東京へ出かけた’

(33) *ísu{=e/=ni}* *súwaQ-ta*
椅子{=ALL/=LOC} 座る-PST
‘椅子に座った’
cf. *ísu=ni* *súwaQ-te-ru*
椅子=LOC 座る-PERF-NPST
‘椅子に座ってる’

3.3.7 比較格（=*jori*）・比較対象格（=*ŋata*）

最後に比較文に現れる 2 つの格形式を取り上げる。比較の基準は比較格（=*jori*）で，比較文の焦点化された主語は主格 =*ŋa* または本稿で比較対象格と呼ぶ =*ŋata* で表す。比較対象（比較文の主語）専用の形式は通言語的に見て非常に珍しいのではないかと思われる[6]。

(34) *taroː=wa* *hanako=jóri* *sé=ŋa* *táka-i*
太郎=TOP 花子=CMPR 背=NOM1 高い-NPST
‘太郎は花子より背が高い’

[6] 比較構文の通言語的研究（Stassen 2005, Dixon 2008 など）では，比較の基準（本方言では=*jori* で標示される部分）を表す形式の類型化が行われている一方で，比較文の主語など比較の対象（= comparee）を表す形式には注意が向けられていない。本方言の =*ŋata* のような形式が世界の諸言語の中で本当に稀な存在なのかあるいは単に見過ごされているだけなのか筆者の知識では断定できないが，少なくとも比較構文の類型論の中で言及されたことがないという点は確かかと思われる。八亀 (2014: 22) にも次のような指摘が見られる：「確認した限りでは，通言語的な研究において，現代日本語の「Aのほうが〜」のように COMPAREE であることを明示する手段がある言語というのは報告がない」。

(35) *hanako=jóri* *taroː=ŋáta* *sé=ŋa* *táka-i*
花子=CMPR 太郎=CMPRE 背=NOM1 高い-NPST
‘花子より太郎の方が背が高い’

4. 動詞の形態論

4.1 動詞の種類と屈折

規則動詞は語幹末が子音（b, m, t~c, n, s, r, k, ŋ, w のいずれか）の子音語幹動詞と語幹末が母音（i, e）の母音語幹動詞の 2 種類に分けられる。アクセントの違いも含めるとさらに，語幹に核がある有核語幹と核がない無核語幹に分けられる。

語幹母音の交替を起こす不規則動詞は *sí-ru*‘する’と *ku-ru*‘来る’の 2 語のみであるが，音便形のみ不規則的な形になる動詞には *ku-u*‘食う’，*ík-u*‘行く’などがあり（4.2 節），命令形が不規則的な動詞には *kúre-ru*‘呉れる’（*kúre*‘呉れ’）がある。また共通語と同じく存在動詞 *ar-u*‘ある’の否定形には形容詞 *na-i*‘無い’が充てられる。

表 15　2 モーラ動詞の屈折パラダイム

	子音語幹		母音語幹		不規則	
	有核	無核	有核	無核	有核	無核
	‘置く’	‘書く’	‘着る’	‘見る’	‘する’	‘来る’
非過去	*ók-u*	*kak-u*	*kí-ru*	*mi-ru*	*sí-ru*	*ku-ru*
過去	*ói-ta*	*kai-ta*	*kí-ta*	*mí-ta*	*sí-ta*	*kí-ta*
命令	*ók-e*	*kak-e*	*kí-jo*	*mí-jo*	*séː*	*kó-i*
意志・勧誘	*ók-o*	*kak-o,* *kák-o*			*sí-jo*	*ko,* *kó-jo*
否定非過去	*ók-aN*	*kak-aN*	*kí-N*	*mi-N*	*sé-N*	*ko-N*
否定過去	*ok-anáNda*	*kak-anáNda*	*kí-naNda*	*mí-naNda*	*sé-naNda*	*kó-naNda*
中止	*ói-te*	*kai-te*	*kí-te*	*mí-te*	*sí-te*	*kí-te*
条件 1	*ók-ja*	*kak-ja*	*kí-rja*	*mi-rja*	*sí-rja*	*ku-rja*
条件 2	*ói-tara*	*kai-tára*	*kí-tara*	*mí-tara*	*sí-tara*	*kí-tara*
否定条件 1	*ók-ana*	*kak-ana*	*kíː-na*	*miː-na*	*séː-na*	*koː-na*
否定条件 2	*ok-anáNdara*	*kak-anaNdara*	*kí-naNdara*	*mí-naNdara*	*sé-naNdara*	*kó-naNdara*

※網掛けは語幹（の第 1 モーラ）にアクセント核がある語形

sí-ru‘する’の語幹は *sí-, sé(ː)-* の 2 種類（長母音語幹を別に数えると 3 種類），*ku-ru*‘来る’の語幹は *ku-, kí-, ko(ː)-, kó-* の 4 種類（母音長を区別すると 5 種類）の交替形を持つ。

アクセントの交替に着目すると，同じ語幹の活用形が同じ型に一貫するとは限らないことが見て取れる。例えば有核の子音語幹（*ók-*‘置く’など）は否定過去形・否定条件形 2 のみ語幹に核がない型に転じ，無核の子音語幹（*kak-*‘書く’など）は意志・勧誘形のみ語幹に核がある型（*kákо*

‘書こう’）を併用する。母音語幹動詞（と不規則動詞）は多くの活用形が語幹に核がある型で現れる。2 モーラ動詞でも 3 モーラ以上の動詞でも各活用形に付く接辞は全く同一の形式であるがアクセントの交替パターンは語幹の長さに応じて変わる部分がある（表 15, 16）。

表 16　3 モーラ動詞の屈折パラダイム

	子音語幹		母音語幹	
	有核	無核	有核	無核
	‘上がる’	‘歩く’	‘上げる’	‘投げる’
非過去	*áŋar-u*	*aruk-u*	*áŋe-ru*	*naŋe-ru*
過去	*áŋaQ-ta*	*arui-ta*	*áŋe-ta*	*naŋe-ta*
命令	*áŋar-e*	*aruk-e*	*áŋe-jo*	*naŋe-jo*
意志・勧誘	*áŋar-o*	*aruk-o*		
否定非過去	*aŋar-áN*	*aruk-áN*	*áŋe-N*	*naŋe-N*
否定過去	*aŋar-anáNda*	*aruk-anáNda*	*aŋe-náNda*	*naŋe-náNda*
中止	*áŋaQ-te*	*arui-te*	*áŋe-te*	*naŋe-te*
条件 1	*áŋar-ja*	*aruk-ja*	*áŋe-rja*	*naŋe-rja*
条件 2	*áŋaQ-tara*	*arui-tára*	*áŋe-tara*	*naŋe-tára*
否定条件 1	*áŋar-ana*	*aruk-ána*	*áŋe-na*	*naŋe-na*
否定条件 2	*aŋar-anáNdara*	*aruk-anáNdara*	*aŋe-náNdara*	*naŋe-náNdara*

2 つの条件形の使い分けはほぼ共通語と同様で，条件形 1（*-(r)ja*）は反事実的条件文 (36) 及び主節が命令文ではない予測的条件文 (37) に用いられる。条件形 2（*-tara*）は主に主節が命令・依頼文の予測的条件文 (38) 及び事実的条件文 (39) に用いられる。反事実的条件文及び予測的条件文では条件形 2 も併用する。

(36)　*teŋami*　*kak-ja*　*jó-kaQta=na*
　　手紙=∅　書く-COND1　良い-PST=SFP
　　‘手紙を書けば良かったな’

(37)　*ásita*　*ame=ŋa*　*hur-ja*　*hánabi=wa*　*cju:sí=zjar-o*
　　明日　雨=NOM1　降る-COND1　花火=TOP　中止=COP-INFR
　　‘明日雨が降れば花火は中止だろう’

(38)　*sóno*　*é:ŋa*　*mí-tara*　*kaNsó:*　*osié-te=no*
　　その　映画=∅　見る-COND2　感想=∅　教える-GER=SFP
　　‘その映画見たら感想教えてね’

(39) (=(14)) *héja=N* *naka* *mí-tara* *taroː{=∅/=ŋa/=a}*
部屋=GEN 中=∅ 見る-COND2 太郎{=∅/=NOM1/=NOM2}
taoré-te-ta
倒れる-PERF-PST
‘部屋の中を見たら太郎が倒れていた’

4.2 子音語幹動詞音便形

子音語幹動詞に過去接辞 *-ta (-da)* や中止形接辞 *-te (-de)*, 条件形接辞 *-tara (-dara)* が付く時の語幹の形（音便形）を下表にまとめる。

表 17　子音語幹動詞の音便形の作り方

語幹末子音	語幹	否定	過去	中止
b	*tób-*‘飛ぶ’	*tób-aN*	*tóN-da*	*tóN-de*
m	*nom-*‘飲む’	*nom-aN*	*noN-da*	*noN-de*
t~c	*tat-*‘立つ’	*tat-aN*	*taQ-ta*	*taQ-te*
n	*sín-*‘死ぬ’	*sín-aN*	*síN-da*	*síN-de*
s	*das-*‘出す’	*das-aN*	*dai-ta*	*dai-te*
s	*ós-*‘押す’	*ós-aN*	*ós-i-ta*	*ós-i-te*
r	*tor-*‘取る’	*tor-aN*	*toQ-ta*	*toQ-te*
k	*kak-*‘書く’	*kak-aN*	*kai-ta*	*kai-te*
ŋ	*toŋ-*‘研ぐ’	*toŋ-aN*	*toi-da*	*toi-de*
w	*káw-*‘買う’	*káw-aN*	*kóː-ta*	*kóː-te*

語幹末子音 /b/, /m/, /n/ は /N/ に転じ, 接辞は有声の異形態（*-da, -de*）を取る。/t/, /r/ は /Q/ に, /s/, /k/, /ŋ/ は /i/ に交替する。ただし /s/ に終わる語幹は *dai-ta*‘出した’のように /i/ に交替する動詞と *ós-i-ta*‘押した’のように /s/ が脱落しない動詞に二分される（ *-i-* は挿入母音と見る）。末尾が /w/ の語幹は, それぞれ以下のように交替する（いわゆるウ音便形）: /aw/ → /oː/, /ow/ → /oː/, /iw/ → /juː/, /uw/ → /uː/。

上述の規則に沿わない例外的な音便形を取る動詞として *íQ-ta (ík-)*‘行った’, *ku-ta (kuw-)*‘食った’がある。

ちなみに *mise-ru*‘見せる’は音便形を取る活用形（過去形, 中止形, 条件形 2）でのみ語幹末の母音が落ちる（*mise-* と *mis-* の 2 つの語幹を併用する）不規則的な動詞である : *mise-ru*‘見せる’, *mise-N*‘見せん’に対して *mis-i-ta*‘見せた’, *mis-i-te*‘見せて’など。

4.3 派生形態論

4.3.1 ヴォイス

ここでは受動態と使役態の 2 つのヴォイスについて述べる。

受身形は接辞 *-(r)are-*, 使役形は接辞 *-(s)as-* または *-(s)ase-* で派生する。

表 18　受身・使役語幹の屈折

		子音語幹	母音語幹	不規則	
		‘書く’	‘見る’	‘来る’	‘する’
受身	非過去	*kák-are-ru*	*mí-rare-ru*	*kó-rare-ru*	*s-áre-ru*
	過去	*kák-are-ta*	*mí-rare-ta*	*kó-rare-ta*	*s-áre-ta*
	否定	*kak-aré-N*	*mi-raré-N*	*ko-raré-N*	*s-áre-N*
使役 1	非過去	*kák-as-u*	*mí-sas-u*	*kó-sas-u*	*(s-ás-u)*
-(s)as-	過去	*kák-as-i-ta*	*mí-sas-i-ta*	*kó-sas-i-ta*	*s-ás-i-ta*
	否定	*kak-as-áN*	*mi-sas-áN*	*ko-sas-áN*	—
使役 2	非過去	*kák-ase-ru*	*mí-sase-ru*	*kó-sase-ru*	*s-ási-ru*
-(s)ase-	過去	*kák-ase-ta*	*mí-sase-ta*	*kó-sase-ta*	*s-ási-ta*
	否定	*kak-asé-N*	*mi-sasé-N*	*ko-sasé-N*	*s-ási-N*

※（）はあまり用いられない語形

アクセントについて触れると，4 モーラ以下の受身・使役形及び母音語幹動詞の受身・使役形では有核語幹と無核語幹の区別がなくなり，4 モーラ以下の受身・使役形は第 1 フットに核がある型，5 モーラ以上の母音語幹動詞の受身・使役形は第 2 フットに核がある型に統一される。

表 19　受身非過去形のアクセント

受身形の長さ	子音語幹		母音語幹	
	有核	無核	有核	無核
	‘置く’など	‘書く’など	‘着る’など	‘見る’など
4μ	*ók-are-ru*	*kák-are-ru*	*kí-rare-ru*	*mí-rare-ru*
5μ	*náŋur-are-ru*	*aruk-aré-ru*	*aŋe-ráre-ru* ~ *aŋer-aré-ru*	*naŋe-ráre-ru* ~ *naŋer-aré-ru*
6μ	*jórokob-are-ru*	*uketór-are-ru*	*narabe-ráre-ru*	*kakure-ráre-ru*

5 モーラの母音語幹動詞の受身形には *aŋeráreru* ~ *aŋeraréru* のような核の位置の揺れが見られるが，これは本来接辞の一部である *r* を語幹側に組み込むか否かの違いを反映した現象と解釈される。*aŋe-rare-ru* という構造（アゲまでが語幹）と見れば，韻律語・フット境界は{(*aŋe*)}{(*ráre*)*ru*}となり核は 3 モーラ目の *ra* に来る。*aŋer-are-ru* という構造（アゲラまでが語幹）と見れば，韻律語・フット境界は{(*aŋe*)*ra*}{(*réru*)}となり核は 4 モーラ目の *re* に置かれる。後者の形態素・韻律構造は *náŋur-are-ru*‘殴られる’のような語幹末が *r* の子音語幹動詞への類推の結果生じたものと推測される。

-(s)as- は過去形・中止形で末尾子音 /s/ の脱落（/i/ への交替）を生じない。すなわち *das-u* ~ *dai-ta* ではなく *ós-u* ~ *ós-i-ta* と同じ屈折パターンとなる：*kák-as-u* ~ *kák-as-i-ta*（**kák-ai-ta*）。

-(s)as- と *-(s)ase-* の 2 つの形式に意味上の使い分けはないが，動詞と活用形の種類によりどちらの接辞を取りやすいかが異なる。過去形・中止形や意志・勧誘形，命令形では *-(s)as-* の方が，

母音語幹動詞及び不規則動詞の否定形・過去否定形では *-(s)ase-* の方が好まれるようである。

格の交替パターンは共通語と同様で，受身文における動作主は与格（*=ne, =ni*）で，使役文の被使役者は与格または対格（*=o*）で標示される。与格と対格の使い分けには動詞の他動性と被使役者の意志性が関わり，他動詞使役文では与格のみ (40)，被使役者の意志性が低い自動詞使役文では対格のみ適格となる (41)。被使役者の意志性が高い自動詞使役文では与格と対格のどちらも適格となる (42)。

(40) *óto:to{=ne/*=o}* *jasai* *kúw-as-i-ta*
弟{=DAT/*=ACC} 野菜=∅ 食う-CAUS-EP-PST
‘弟に野菜を食べさせた’

(41) *óto:to{=o/*=ne}* *murijári* *ojoŋ-asé-ta*
弟{=ACC/*=DAT} 無理やり 泳ぐ-CAUS-PST
‘弟を無理やり泳がせた’

(42) *óto:to{=o/=ne}* *súki-na=dake* *ojoŋ-asé-ta*
弟{=ACC/=DAT} 好き-ADJZ=だけ 泳ぐ-CAUS-PST
‘弟に好きなだけ泳がせた’

4.3.2 アスペクト

中止形（*-te / -de*）に助動詞 *í-ru*‘居る’を組み合わせて進行相・結果相を表す。西日本方言に見られるような進行相と結果相の形式上の区別は当地には存在しない。この形式は動作の進行あるいは結果の継続のみを表し，変化の進行を表すことはできない。例えば *síN-de-ru*‘死んでいる’のような瞬間動詞のアスペクト形に「死につつある」といった変化進行の解釈はなく「死んだ状態にある」といった結果相の意味のみ表す。中止形と *í-ru*‘居る’は否定形を除き形態的に融合し，表面上は *-te / -de* に屈折接辞が直接後接したような形を示す。

表 20　アスペクト形の屈折

	kak-‘書く’
非過去	*kai-té-ru (< kai-te　í-ru)*
過去	*kai-té-ta (< kai-te　í-ta)*
命令	*kai-té-jo (< kai-te　í-jo)*
否定非過去	*kai-te　í-N*
否定過去	*kai-te-náNda (< kai-te　í-naNda)*
中止	*kai-té-te (< kai-te　í-te)*
条件 1	*kai-té-rja (< kai-te　í-rja)*
否定条件 1	*kai-té-na (< kai-te　í:-na)*

(43) *naNde* *taQta* *mícuki=sika* *í-N* *síto=o*
なぜ たった 3 か月=しか 居る-NEG 人=ACC
óboe-te-ru=N=nja=Qte
覚える-GER.居る-NPST=NMLZ=COP=SFP
‘なんでたった 3 か月しか居ない人を覚えてるんだよ’

(44) *cjoQto* *hoko=ni* *taQ-té-jo*
ちょっと そこ=LOC 立つ-GER.居る-IMP
‘ちょっとそこに立ってろ’

4.3.3 モダリティー

ここでは推量，伝聞，義務，可能，願望の 5 つのモダリティー表現について述べる。

推量表現には主としてコピュラの推量形 *=zjar-o* を用いる。動詞・形容詞の過去形に後接すれば過去推量，否定形に後接すれば否定推量を表す。

(45) *kjoː=wa* *cúkare-ta=de* *íme* *mi-N=zjár-o=na*
今日=TOP 疲れる-PST=CSL 夢=∅ 見る-NEG=COP-INFR=SFP
‘今日は疲れたから夢を見ないだろうな’

伝聞情報は引用表現に由来する *=Qte, =Qta*[7] を用いて表す[8]。

(46) *kjoː=wa* *ame=ŋa* *hur-u{=Qta/=Qte}=no*
今日=TOP 雨=NOM1 降る-NPST=QUOT=SFP
‘今日は雨が降るそうだね’

義務表現は主として否定条件形 1（*-(a)na*）に *ák-aN*‘明かない’や *ík-aN*‘行かない’を続け

[7] *=Qta* の語源は *Qte júː-ta*‘と言った’。*=Qta* にはこの原義通りの用法もある：
(a) *dóko=e* *ík-e=Qta=N=ke=ne*
どこ=ALL 行く-IMP=QUOT=NMLZ=QP=SFP
‘どこへ行けと言ったのかね’

[8] ちなみにコピュラの非過去形に *=Qta* が後接すると偶然にもコピュラの過去形と同音になってしまう：
(b) *kjoː=wa* *ame=zjá=Qta*
今日=TOP 雨=COP.NPST=QUOT
‘今日は雨だそうだ’
(c) *kjoː=wa* *ame=zjáQ-ta*
今日=TOP 雨=COP-PST
‘今日は雨だった’

た‘～しなければだめだ／いけない’という複文で表す。しばしば主節を省略して条件節のみで義務の意を表すのも共通語と同様である。

(47) *ame* *hur-u* *kákuŋo* *sí-tek-ana*
雨=∅ 降る-NPST 覚悟=∅ する-GER.行く-NEG.COND1
ák-aN=no=ja *Qcjú-te* [...]
明く-NEG=NMLZ=COP QUOT.言う-GER
‘雨が降る覚悟をして行かなければならないんだと言って[...]’

可能形は接辞 *-(r)e* で派生する。可能語幹の屈折パターンは規則的な母音語幹動詞に準じる。アクセントは可能語幹が 2 モーラ以下の場合動詞語根の有核／無核の区別を受け継ぎ（*ók-* → *ók-e-ru*‘置ける’／ *kak-* → *kak-e-ru*‘書ける’），3 モーラ以上になる場合はその区別が失われ第 2 フットに核がある型に統一される（*áŋe-* → *aŋe-ré-ru*‘上げられる’／ *naŋe-* → *naŋe-ré-ru*‘投げられる’）。不規則動詞 *ku-ru*‘来る’の可能語幹は *ko-re-* で，*sí-ru*‘する’の可能形には *déki-ru*‘できる’が語彙的に補充される。本方言の可能表現は基本的にこの 1 形式のみで，能力可能と状況可能の形式上の区別はない。

(48) *zi=ŋa* *kak-e-N*
字=NOM1 書く-POT-NEG
（この子はまだ小さいので／部屋が暗いので）‘字が書けない’

上例のように可能文では，対格標示される目的語が主格に昇格するという受動態と同様の格の交替が見られる（この点から見ればヴォイスの項で取り上げるべき現象でもある）。

なお可能表現の否定形（不可能表現）に限っては *-(r)e* に代わり受身接辞 *-(r)are* を用いることも多い (49)(59)。言い換えれば，受身否定形には不可能（‘～できない’）を表す用法もあるということである。

(49) *káne=ŋa* *na-kena* *ku-tek-aré-N*
金=NOM1 無い-NEG.COND1 食う-GER.行く-POT(PASS)-NEG
‘金がなければ食っていけない’

願望表現は共通語と同じく接辞 *-ta* で形容詞を派生して表す（形容詞の屈折は 5 節参照）。子音に終わる語幹との間には *kák-i-ta-i*‘書きたい’のように挿入母音 *-i-* が介在する。アクセントは非過去形が 2 モーラ以下の動詞であれば語根の有核／無核の区別を問わず語根に核がある型に統一され（*ók-u* → *ók-i-ta-i*‘置きたい’／ *kak-u* → *kák-i-ta-i*‘書きたい’），非過去形が 3 モーラ以上の動詞であれば語根の有核／無核の区別が願望形にも引き継がれる（*áŋe-ru* → *áŋe-ta-i*

‘上げたい’／ *naŋe-ru* → *naŋe-tá-i*‘投げたい’）。

表 21　願望形のアクセント

非過去形の長さ	子音語幹		母音語幹		不規則	
	有核	無核	有核	無核	有核	無核
	‘置く’など	‘書く’など	‘着る’など	‘見る’など	‘する’	‘来る’
2μ	*ók-i-ta-i*	*kák-i-ta-i*	*kí-ta-i*	*mí-ta-i*	*sí-ta-i*	*kí-ta-i*
3μ	*áŋar-i-ta-i*	*aruk-i-tá-i*	*áŋe-ta-i*	*naŋe-tá-i*		
4μ	*jórokob-i-ta-i*	*uketór-i-ta-i*	*nárabe-ta-i*	*kakure-tá-i*		

※網掛けは第 1 モーラに核がある語形

4.3.4　待遇

尊敬形は接辞 *-nahar (-nasar)* で派生される。語幹末が /r/ である場合 /r/ が /N/ に転じ（例：*áŋar-* → *áŋaN-nahar-u*‘上がりなさる’），その他の語幹末子音との間には挿入母音 *-i-* が挿入される。命令形は不規則的な *-nahai (-nasai)* という形を取る。

表 22　尊敬語幹の屈折

	子音語幹	母音語幹	不規則	
	‘書く’	‘見る’	‘来る’	‘する’
非過去	*kak-i-nahár-u*	*mi-nahár-u*	*ki-nahár-u*	*si-nahár-u*
過去	*kak-i-naháQ-ta*	*mi-naháQ-ta*	*ki-naháQ-ta*	*si-naháQ-ta*
命令	*kak-i-nahái*	*mi-nahái*	*ki-nahái*	*si-nahái*
否定	*kak-i-nahár-aN*	*mi-nahár-aN*	*ki-nahár-aN*	*si-nahár-aN*

表 23　尊敬形のアクセント

尊敬形の長さ	子音語幹		母音語幹	
	有核	無核	有核	無核
	‘置く’など	‘書く’など	‘着る’など	‘見る’など
4μ			*ki-nahár-u*	*mi-nahár-u*
5μ	*ók-i-nahar-u*	*kak-i-nahár-u*	*áŋe-nahar-u*	*naŋe-nahár-u*
6μ	*áŋaN-nahar-u*	*aruk-í-nahar-u*	*nárabe-nahar-u*	*kakuré-nahar-u*
7μ	*jórokob-i-nahar-u*	*uketóN-nahar-u*		

アクセントは語幹が有核かつ尊敬形が 5 モーラ以上であれば第 1 フット（第 1 モーラ）に核がある型，語幹が無核または尊敬形が 4 モーラ長であれば第 2 フットに核がある型となる。尊敬形では形態的な境界と韻律的な境界が一致せず，*-nahar, -nasar* の *...na* までが直前の語幹と同じ韻律語に組み込まれる。例えば *kak-i-nahár-u*‘書きなさる’を見ると 3 モーラ目ではなく 4 モーラ目の *ha* に核が来るが，これは {(*kaki*)}{(*naha*)*ru*} ではなく {(*kaki*)*na*}{(*haru*)} と分節された結

果と分析できる。語幹が 3 モーラの *kakuré-nahar-u*‘隠れなさる’もまた {(*kaku*)*re*}{(*naha*)*ru*} ではなく {(*kaku*)(*rena*)}{(*haru*)} という韻律語・フット構造から導かれる形である。

4.4 存在動詞

存在動詞には有生物の主語を取る *í-ru*‘居る’と無生物の主語を取る *ar-u*‘ある’がある。本方言では「オル」は用いない。共通語と同じく *ar-u* は否定用法を欠いており形容詞 *ne:* (*na-i*)‘ない’が代用される。また *ar-u*‘ある’の丁寧語にあたる敬語動詞に *góis-u*‘ございます’がある。過去形は *góis-i-ta*，否定形は *goisé-N*，否定過去形は *goise-náNda* と不規則な変化を有する。

(50)

ója=mo	*í-N=si*	*kó=mo*	*í-N*
親=も	居る-NEG=CONJ	子=も	居る-NEG

‘親もいないし子もいない’

(51)

kóno	*múra=ni*	*bjo:íN=wa*	*goisé-N*
この	村=LOC	病院=TOP	ある.HON-NEG

‘この村に病院はありません’

5. 形容詞・コピュラ形態論

5.1 基本構造

本方言において屈折する品詞には動詞の他に形容詞とコピュラがある。形容詞には非過去形で接辞 *-i* を取るものと接辞 *-na* を取るものの 2 種類の屈折パターンがあり，それぞれを *-i* 形容詞，*-na* 形容詞と呼ぶことにする。

表 24　形容詞・コピュラの屈折

	-i 形容詞	*-na* 形容詞	コピュラ
	haja-‘速い’	*ráku*‘楽’	
非過去	*hája-i*	*ráku-na*	*ráku=zja*
連体非過去			*(ráku=na)*[9]
過去	*haja-káQta*	*ráku-na-kaQta*	*ráku=zjaQ-ta*
推量	*haja-káro:* *(hája-i=zjar-o)*	*ráku-na-karo:*	*ráku=zjar-o*
副詞	*hajo* ~ *hajo: (<haja-u)*	—	*(ráku=ni)*[10]
中止	*hajo(:)-te*	—	*ráku=de*
条件 1	*haja-kérja*	—	*ráku=nara*
条件 2	*haja-káQtara*	*ráku-na-kaQtara*	*ráku=zjaQ-tara*

[9] 準体助詞 *=N (=no)* が後続する時のみ使われる形。
[10] *=ni* は与格助詞と見る。

形容詞は動詞ともコピュラとも異なる，他の品詞とは区別されるべき固有の屈折パターンを有する。過去接辞が *-kaQta* となる点がその特徴の一つである。*-na* 形容詞は名詞語幹に接辞 *-na* が付き派生された形容詞で，非過去形で接辞 *-i* を取らない点や副詞形などいくつかの活用形を欠いている点が *-i* 形容詞と異なる。形容詞化接辞 *-na* に代わりコピュラ *=zja* が後接しても全く同じ意味を表す (52)。使用頻度としてはむしろ連体非過去形を除くと *-na* 形容詞形よりコピュラ形の方がよく使われるが，コピュラの非過去形 *=zja* に連体修飾用法がないため連体非過去形に限っては *-na* 形容詞形のみ適格となる (53)。

(52) *ima=no* *inekári=wa* *mukasi=jóri* *uNto*
今=GEN 稲刈り=TOP 昔=CMPR ずっと
ráku{=zja/-na}=no
楽{=COP.NPST/-ADJZ.NPST}=SFP
‘今の稲刈りは昔よりずっと楽だね’

(53) *júki=ŋa* *nó:-te* *ráku{-na/*=zja}*
雪=NOM1 ない-GER 楽{-ADJZ.NPST/*=COP.NPST}
sjó:ŋacu=zja=no
正月=COP.NPST=SFP
‘雪がなくて楽な正月だね’

コピュラは *=zja, =zjaQ-ta...* と併せて *=ja, =jaQ-ta...* も用いられる。*=ja* は準体助詞 *=N* に後続するとしばしば連声を生じ *=N=nja* ともなる（(12), (22), (43) など参照）。

-i 形容詞の副詞形では副詞化接辞 *-u* が語幹末の母音との融合を生じる結果, 語幹末母音 *a* は *o(:)* に交替する。語幹末母音が *i* の場合は，おそらく通時的に *hosi-u* > *hosju* > *hosi* のような変化を経た結果，副詞形が語幹単独形と同一の音形になっている。

表 25 *-i* 形容詞の語幹の交替

	haja-‘速い’	*oso-*‘遅い’	*acu-*‘暑い’	*hosi-*‘欲しい’
非過去	*hája-i*	*óso-i*	*ácu-i*	*hósi-i*
過去	*haja-káQta*	*oso-káQta*	*acu-káQta*	*hosi-káQta*
副詞	*hajo(:) (<haja-u)*	*oso(:) (<oso-u)*	*acu(:) (<acu-u)*	*hosi (<hosi-u)*

形容詞の否定表現は「副詞形＋形容詞 *ne: (na-i)*‘ない’」(54)，コピュラの否定表現は「中止形＋ *ne: (na-i)*」(55) と 2 語に分かれて表す。

(54) *kóno* *náNba=wa* *sóNne* *karo (< kara-u)* *ne:=jár-o*
この 唐辛子=TOP そんなに 辛い.ADVZ 無い.NPST=COP-INFR
‘この唐辛子はそんなに辛くないだろう’

(55) *mukasí=wa* *se:kácu=ŋa* *ráku=de* *ná-kaQta*
昔=TOP 生活=NOM1 楽=COP.GER 無い-PST
‘昔は生活が楽でなかった’

非過去形が 2 モーラの形容詞は *i-i*‘良い’， *na-i*‘ない’，*sú-i*‘酸い’，*ká-i*‘痒い’の 4 語があるがいずれも不規則的な活用形を含む（‘濃い’は *kó:-i* で 3 モーラ形容詞）。

表 26　2 モーラ形容詞の屈折

	i-‘良い’	*na-*‘無い’	*su(:)-*‘酸い’	*kai-*‘痒い’
非過去 連体非過去	*i-i*	*na-i*	*sú-i*	*ká-i (<kái-i)*
過去	*jó-kaQta*	*ná-kaQta*	*su:-káQta*	*kai-káQta*
副詞	*jó: (<jó-u)*	*nó: (<ná-u)*	*su: (<su-u)*	*kaju (<kai-u)*
条件 1	*jo-kerja*	*na-kena,* *na-kerja*		
条件 2	*jó-kaQtara*	*ná-kaQtara*	*su:-káQtara*	*kai-káQtara*

i-i‘良い’には語幹の交替が見られ（非過去形のみ *i-*，その他は *jo-*），*na-i*‘ない’は条件形として *na-kerja, ná-kaQtara* の他 *na-kena* という語形を持つ（*-kena* という接辞はこの語にしか現れない）。義務表現の中で用いられる *na-kena* は他の条件形に置き換えることができない (56) (57)。

(56) *kóme=ŋa* *{na-kena/na-kerja}* *ímo* *ku-e (<kuw-e)*
米=NOM1 無い-COND1 芋=∅ 食う-IMP
‘米がなければ芋を食え’

(57) *káne=ŋa* *{na-kena/*na-kerja}* *ák-aN*
金=NOM1 無い-COND1 明く-NEG
‘金がなければならない’

5.2 ノダ文

共通語のノダ文に相当する構文は次の構造を有する：「述語＋準体助詞（*=N, =no*）＋コピュラ（*=zja, =ja*，または *=N* に続く時に *=nja*）」。動詞・形容詞・コピュラに直接コピュラが後

接することはなく準体助詞は必須である。準体助詞には 2 つの異形態があり否定接辞（*-N*）に続く時のみ *=no* となる（その他の場合は必ず *=N*）。

(58) *A:* *＊＊-saN=ra* *íQ-ta* *kóto* *aN=nja (< ar-u=N=nja)*
＊＊-TTL=ILST 行く-PST こと=∅ ある-NPST=NMLZ=COP
B: *N* *ar-u=N=njá=Qte*
うん ある-NPST=NMLZ=COP=SFP
（話者 A）‘＊＊さんなんかは行ったことあるんだ’（＊＊は人名）
（話者 B）‘うん，あるんだよ’

(59) *aruk-aré-N=no=ja=Qte* *sjákuQ-te* *móraw-ana*
歩く-POT-NEG=NMLZ=COP=SFP 引き上げる-GER もらう-NEG.COND1
‘歩けないんだよ引き上げてもらわないと’

5.3 丁寧

形容詞の副詞形あるいはコピュラの中止形に *góis-u*‘ございます’を組み合わせると形容詞・コピュラの丁寧語形を作ることができる。

(60) *kjoː=wa* *sabuː* *góis-u=no*
今日=TOP 寒い.ADVZ ある.HON-NPST=SFP
‘今日は寒うございますね’

(61) *goQcáN=de* *góis-i-ta*
ご馳走様=COP.GER ある.HON-EP-PST
‘ご馳走様でした（ご馳走になりました）’

6. 取り立て助詞・終助詞

本方言の取り立て助詞には *=wa*（主題・対比）(62)，*=mo*（添加・並列），*=sae*（添加），*=sika*（限定），*=dake*（限定），*=ra*（例示）(63)(64) などがある。このうち *=wa, =mo, =sae, =sika* は主格・対格助詞（*=ŋa, =a, =o*）を除く格助詞の後に付く。同一名詞句内にこれら 4 つの取り立て助詞と主格・対格助詞は共存できない。主格・対格名詞句を取り立てる場合はこれらの取り立て助詞のみが付くことになる。*=dake, =ra* は主格・対格助詞を含む格助詞の前（名詞の直後）に付く。複数接辞 *-ra* とは無生物名詞にも付き得る点，複数の意は表さない点が異なる。*=sika* の用例は (43) を参照されたい。

(62) *níku=wa* *ku-u=kédo* *sákana=wa* *kuw-aN*
肉=CNTR 食う-NPST=CONC 魚=CNTR 食う-NEG
‘肉は食べるが魚は食べない’（*=wa* の対比用法）

(63) *sío=ra* *íre-tara* *ák-aN*
塩=ILST 入れる-COND2 明く-NEG
‘塩なんか入れてはいけない’

(64) *o:sáka=ra* *ík-u=to* *síto=ŋa* *o:-te*
大阪=ILST 行く-NPST=COND 人=NOM1 多い-GER
jówar-u=N=zja
疲れる-NPST=NMLZ=COP
‘大阪などへ行くと人が多くて疲れるんだ’

多種多様な終助詞の全てを取り上げることは叶わないが，ここでは疑問の終助詞 *=ka, =ke* と聞き手への確認を求める終助詞 *=na, =no, =ne* の使い分けについて述べる。

まず *=ka, =ke* は専ら肯否疑問文で用いられ疑問詞疑問文にはあまり現れない。ほとんどの疑問詞疑問文はコピュラ文の形を取り，なおかつコピュラの非過去形（*=zja*）には *=ka, =ke* が後接しないためである (65)(66)(67)。コピュラの過去形（*=zjaQ-ta*）には *=ka* も *=ke* も後接し得るが推量形（*=zjar-o*）には *=ka* のみ後接できる (68)。

表 27　疑問小辞（*=ka, =ke*）の分布

述語の末尾	疑問小辞の後接可否	
	=ka	*=ke*
動詞・形容詞・名詞	○	○
コピュラの過去形（*=zjaQ-ta*）	○	○
コピュラの非過去形（*=zja*）	×	×
コピュラの推量形（*=zjar-o*）	○	×

(65) *kóre=wa* *naN{=zja/*=ka/*=ke/*=zja=ka}*
これ=TOP 何{=COP.NPST/*=QP/*=QP/*=COP.NPST=QP}
‘これは何だ’

(66) *naNde* *kíNno* *jásuN-da=N{=zja/*=ka/*=zja=ka}*
なぜ 昨日 休む-PST=NMLZ{=COP/*=QP/*=COP=QP}
‘どうして昨日休んだの’

(67) *hoN* *cjoQpázime=ŋa* *dáre=zja* *Qcjú-u=no=wa*
ほんの 最初=NOM1 誰=COP.NPST QUOT.言う-NPST=NMLZ=TOP
wakar-áN=ta=N (< wakar-áN=Qta=N=de) *ne:=ké=no*
分かる-NEG=QUOT=NMLZ=COP.GER ない.NPST=QP=SFP
‘一番最初が誰だと言うのは分からないと言ったんじゃないかね[11]’

(68) *kóre=wa* *naN=zjár-o{=ka/*=ke}*
これ=TOP 何=COP-INFR=QP
‘これは何だろうか’

=ne, =no, =na の使い分けには聞き手への敬意度が関わる。*=ne* > *=no* > *=na* の順に敬意度が高く，*=no, =na* は同等か目下の相手に (69a)(70)，*=ne* は目上の相手に用いる (69b)(71)。接辞による敬語形の派生や敬語動詞に加えて，終助詞の使い分けもまた待遇表現の一手段として利用されている。

(69a) *mukasí=wa* *aNmári* *tabe-náNda=de=no*
昔=TOP あまり 食べる-NEG.PST=CSL=SFP
‘（肉や魚は）昔はあまり食べなかったからね’（同輩に対して）

(69b) *mukasí=wa* *aNmári* *tabe-náNda=de=ne*
昔=TOP あまり 食べる-NEG.PST=CSL=SFP
‘（肉や魚は）昔はあまり食べませんでしたからね’（目上の人に対して）

(70) *sóno* *síŋoto=wa* *omaé=ŋa* *sí-ru=N=zja=na*
その 仕事=TOP 2SG=NOM1 する-NPST=NMLZ=COP=SFP
‘その仕事はお前がするんだね’（やや目下の相手に対して）

(71) *áNta=no* *kasa=wa* *dóre=zjar-o=ne*
2SG=GEN 傘=TOP どれ=COP-INFR=SFP
‘あなたの傘はどれでしょうね’（目上の人に対して）

[11] 「〜は分からないそうなのだ」の否定疑問文。共通語への直訳は難しい。

略号一覧

1	1st person	1 人称	HON	honorific	敬語
2	2nd person	2 人称	ILST	illustrative	例示
ABL	ablative	奪格	IMP	imperative	命令
ACC	accusative	対格	INFR	inferential	推量
ADJZ	adjectivizer	形容詞化	LOC	locative	位格
ADN	adnominal	連体	LST	listing	列挙
ADVZ	adverbalizer	副詞化	NEG	negation	否定
ALL	allative	方位格	NMLZ	nominalizer	名詞化
CAUS	causative	使役	NOM	nominative	主格
CMPR	comparative	比較格	NPST	non-past	非過去
CMPRE	comparee	比較対象	PASS	passive	受身
CNTR	contrastive	対比	PERF	perfect	完了
CONC	concessive	逆接	PL	plural	複数
COND	conditional	仮定	POT	potential	可能
CONJ	conjunction	接続詞	PROG	progressive	進行
COP	copula	コピュラ	PST	past	過去
CSL	causal	理由	QP	question particle	疑問助詞
DAT	dative	与格	QUOT	quotative	引用
EP	epenthetic vowel	挿入母音	SFP	sentence final particle	文末助詞
FIL	filler	フィラー	SG	singular	単数
GEN	genitive	属格	TOP	topic	主題
GER	gerund	分詞	TTL	title	敬称

- \- 接辞境界
- = 接語境界
- \+ 語根境界（複合境界）

参照文献

上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題 2　記述的研究篇』167–209. 東京：明治書院.

佐藤亮一 (1983) 「福井市，および，その周辺地域のアクセント―調査法と型の区別の現れ方との関連を中心に―」『国語学研究』23: 1–19.

新田哲夫 (2006) 「生き物名に付く接尾辞「メ」」『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』37–53. 科研費報告書.

松倉昂平 (2014) 「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35: 141–154.

松倉昂平 (2018) 「福井県池田町方言の「準多型」アクセントとフット・韻律語構造」『第 32 回日本音声学会全国大会予稿集』150–155.

八亀裕美 (2014) 「現代日本語における「比較」へのアプローチ」『甲南大學紀要文学編』164: 13–22.

山田達也 (1984) 「動物名に付く「メ」について―岐阜県揖斐郡の場合―」『名古屋・方言研究会会報』1: 1–6.

Dixon, Robert M.W. (2008) Comparative constructions: A cross linguistic typology. *Studies in Language* 32 (4): 787–817.

McCarthy, John J. & Alan Prince (1996) Prosodic Morphology 1986.[12]

Stassen, Leon (2005) Comparative Constructions. In Martin Haspelmath et al. (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, 490–491. Oxford: Oxford University Press.

[12] インターネット上の資料。University of Massachusetts, Amherst の HP にて公開されている。https://scholarworks.umass.edu/linguist_faculty_pubs/13（2022 年 3 月 5 日閲覧）